

医療福祉・在宅看取りの地域創造会議 第3回WG会議 要旨

2012/1/17 18:30～20:15

【要旨／①医療ワーキンググループ】

I. 在宅医療チームとしての医師の役割等について

- 必ずしも医師が中心である必要はなく、コミュニケーションにより、初めてでもうまくやれる。
- 地域医療の経験の浅い医師には過剰な延命措置を行う場合もあり、むしろ医師がいない方がうまくいく場合もある。
- Care と Cure の違いがわかる医師が少なく、在宅医療の障害となる場合もある。
- チーム診療が上手くいっている事例：『地域性、病院がなく診療所の先生を大事にする土地柄、スタッフの努力、地域に責任をもつ覚悟。（医療機関が多いと、選択できる反面、責任が持ちにくい。）』

II. 家族の在宅医療に対する理解と覚悟

- 家族も医師の言葉には従順な場合が多く、主治医を変えるのは勇気が必要。家族に在宅で看取るという覚悟があるか疑問であり、家族も在宅医療を学ぶことが必要。
- 終末期を思い描かないといけない状況になっている。常日頃から考えておく必要があり、必要な時に様々なことを選択するためには覚悟もいる。

III. 往診してくれる医師を増やすためには

- 「かかりつけ医」≠「往診する医師」、「往診する医師」≠「看取りをする医師」。
- 開業医（や在宅薬局）にとって診療報酬加算を得るための書類作成が負担であり、進めるためには書類作成等の負担を軽くするとともに、診療点数のとり方や多職種連携の仕方等の在宅医療に関する情報提供が必要。
- 在宅医療をやってない開業医に、今さら往診してもらうのは難しく、若い医師を育てていくほうが確実であり、併せて総合医としての必要な高度な知識・経験を、医学部での教育体制や、在宅医療を学べる機会や場の提供等の取組が必要。
- 医師にとっての在宅医療のメリットの広報や、在宅医療医師の支援を行うため、困っていること（こんな不自由がある等）などの意見集約を行うべき。
- 提案事項 (1)研修：在宅医療シミュレーション研修、(2)マニュアルづくり：在宅医療マニュアル「あなたも在宅医になりませんか?」、(3)相談窓口：（仮称）在宅医療110番（開業医が困ったときに相談できる窓口）。

*これらの研修やマニュアルの中で、診療報酬・介護報酬等に関することや、社会資源の活用といった関係者との連携のとり方等、在宅医療に関する情報を提供していく。

【要旨／②医療福祉連携ワーキング】 ～ 他職種連携の事例・方法 ～

I. 在宅療養手帳関係

- 訪問診療をする際、必要なことがヘルパー等で対応出来ない事例もあり、ケアの細かなところまで関係者で共有が必要であり、県下の一部で導入が進んでいる「在宅療養手帳」への取り組みが進むと良い。
- この「在宅療養手帳」に自分の看取りへの考え方等も記入する欄を設けており、看取について家族（支援者）、本人が考えるきっかけとなればと思う。
- 県の訪問看護連絡調整会議でクリティカルパスについて協議をしており、県医師会も在宅ITを活用した仕組み作りが始まっている。

II. 病院からの退院・入院に関して

- 訪問歯科診療の必要性が介護者（家族・ヘルパー）に理解されていない面があり、退院カンファレンスに、歯科医があまり参加できていない。
- 退院カンファレンスにMSWの調整で病院の医師が参加していることも多い。
- 在宅で看取りに向け、主治医と病院の医師で急変時の考え方を合わせることも必要。
- ケアホーム利用の重心の場合、地域で対応してくれる医師がないことが課題。

－薬剤師の連携について－

- 薬剤師との連携がほとんど出来ておらず、在宅療養管理指導についても薬局側が体制をとれない面もある。最近、ケアマネ向けの研修会等で、連携の意識も出てきている。
- 薬局と病院の薬剤師の連携、地域の薬剤師ネットワークを構築や、ドクターをはじめとした関係者に薬剤師による在宅療養管理指導の必要性について理解してもらう事が必要。

－他職種交流の場について－

- 他職種連携について、医師、訪問看護とヘルパー、施設のワーカー等が交流を持ちチームを組めるような体制を作ることが必要。ただし、呼びかけを誰が行うかが課題。
- 包括支援センターが、人をつなぐ役割を担うとともに、つなぐ仕組みづくりが必要。
- 地域で環境が異なるので、地域で交流の場を持てるようにするのが良い。各職種が自分の役割と他職種の役割を知ることが大切。
- 所属の違う同職種の連携、ネットワークを作ることも必要。

－啓発関係－

- 看取りの啓発について、在宅の現場を見てもらう事が必要であり、メディアや新聞、報道関係の人に入ってもらい、マスコミを巻き込んでいくことが必要。
- 様々な人に知ってもらうためには、フリーペーパーやフェイスブック等での発信や、子どもに伝わるような方法を考えることも必要。
- このワーキングを地域に持って帰って、地域にあった形で実践していくこと、活動を生んでいくこと、地域で輪を広げて行くことが大切。

*それぞれのワーキングでの意見を整理し、次回の議論につなげていく。